

## 庄内川・矢田川流域の河川浄化・環境整備活動

矢田・庄内川をきれいにする会

### 1. はじめに

昭和49年、当時の日本は高度成長期の真っただ中にあり、水も大気も汚れるのが当たり前の時代でした。汚れる前は、魚をつかみ、泳ぐことができた庄内川が、廃液、悪臭、ヘドロ、汚物放棄でやせ衰え、魚も住めぬ死の川となり、見捨てられていたのです。そのような時代背景のもとで、きれいにする会は「庄内川水系を汚すすべての汚染源に対し、きれいで快適な生活環境をとり戻し、次代へ引きつぐ」ことを目的として掲げ、活動を開始しました。今年で活動35年目を迎えました。

### 2. 看板設置活動

運動の第一歩は行政や市民にいかにかを見せ、川の実態を知ってもらうかに置き、一般の人々の目と足を川に集める行事を行うことにしました。「川の汚れは心の汚れ」の看板を設置、シンボルマークバッチの作成、テーマソング川の歌の発表会、食べられない魚釣り大会、桜の銀行の開設と、立て続けに活動の輪を広げました。

「川の汚れは心の汚れ」の立て看板の取り付け活動は、昭和50年6月2日に一斉に新聞報道されました。当時の中日新聞を引用すると、「看板は縦60センチ、横90センチ。白地のブリキ板に緑色でフチどりし、黒字でくっきりと「川の汚れは心の汚れ」。会の趣旨に賛同した看板屋さんが、市価の半額で書いてくれたが、ブリキ板、木材、防腐剤などの材料費を含めれば、一本ざっと四千円弱。会費や会員の寄付でこれをまかなった」と書いてありました。(写真1)

私たちの活動は対立軸を設けるものではなく、「住民・企業・行政が三位一体とならなければ川はきれいにならない」「我々は環境破壊の被害者でありながら加害者でもある」という姿勢の下、訴訟に依らず、発想と企画で住民から広く興味関心を



写真1. 「川のよごれは心の汚れ」看板設置活動。



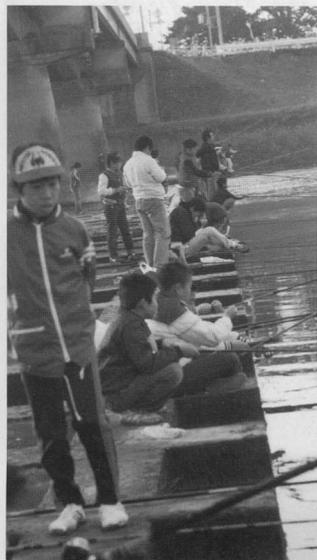
写真2. 100本目の看板は本山名古屋市長の立ち合いで設置。

もってもらい、それを後ろ盾に企業や行政に要請していくという手法をとりました。当時の本山名古屋市長にはこの活動に理解をいただき、100本目の看板は本山市長とともに立てることができました。(写真2) 昭和51年7月には、瀬戸の陶土、釉薬関係の工場が、県陶器工業組合の指導のもとに自社の工場排水口を明示し、白濁の川の返上につとめるとの新聞記事が掲載されましたが、当会では工業組合に対し、歓迎のエールを送り、矢田川上流の瀬戸市にも看板設置の協力を依頼しました。また、幼稚園の園児が卒園記念に看板を5本、矢田川に立ててくれました。

当会は平成12年12月に建設省（現国土交通省）の第1回中部未来創造大賞を受賞しましたが、それを記念して、庄内川左岸と矢田川右岸の交わったポイントに「川の汚れは心の汚れ」とする石碑を立てることができました。



▲白い石鯰の泡の中に魚は生きている



▶夜も明けないうちから  
受付を待つ



写真3. 食べられない魚釣り大会。



写真4. 魚釣り大会表彰式。多くの小学生が参加。

### 3. 魚釣り大会

昭和50年6月、最初の釣り大会を「食べられない魚釣り大会」と銘打って実施しました。釣り場の水分橋には日ごろ人が集まらないのに350名もの釣り人が参加しました。水は雨上がりと水田作業で水量は豊富であったにも拘わらず、黄土色に濁り、風が吹く度に工場排水のニオイが鼻を突き、ヘドロがたまった状態でした。このような川で魚が釣れるのかとの疑問の声も上がりましたが、白ハエ、フナ、コイ、ナマズなどが釣れたのです。しかし、奇形魚も混じり、とても臭くて食べられる魚では

ありませんでした。川の汚染の状態を知ってもらいたいという企画は大成功でした。9月には親子魚釣り大会、10月に母子魚釣り大会を行いました。(写真3、4)

昭和51年から、魚釣り大会は庄内川まつりとして、次のような様々な名称の副題をつけて第34回まで実施してきました。

- 食べられない魚釣り大会、●食べられるかも知れない魚釣り大会、●いつかは食べられる魚釣り大会、●鮎かえれ庄内川魚釣り大会、●鮎のすむ庄内川魚釣り大会、●新しい川づくりを目指す庄内川魚釣り大会、●鮎が泣いている庄内川魚釣り大会、●よみがえれ庄内川魚釣り大会、●水質基準ランクアップ記念魚釣り大会、●もっときれいになれ庄内川魚釣り大会、●天然鮎が遡上できる庄内川魚釣り大会、●天然鮎とアユカケがいた庄内川魚釣り大会、●天然鮎とサツキマスが泳ぐ庄内川魚釣り大会、●水質ワースト1返上!庄内川魚釣り大会、●生物多様性を重視。

昭和55年の釣り大会では600名の参加者があり

ました。この間、泡立つ川の原因物質である合成洗剤追放、川の清掃活動、排水管理を行う春日井市や排水源の企業へは毎年水質改善の要請をしてきました。平成8年3月にはE級からD級（水分橋から下流域）へランクアップしたことは活動の成果と言えるでしょう。王子製紙春日井工場では、昭和50年以降、紙の生産量は2.5倍に増加していますが、BOD、CODともに長期的には減少しているので、企業努力は認めることができるでしょう。しかし、この数年、数値の頭打ちが見られるので、さらに一段の改善が要求されます。

副題を見ると、徐々に明るい兆しを感じることができそうですが、その過程で解決すべき課題が見つかりました。汚れた川を健気に遡上してきた稚アユが堰を上ることができなかったのです。これに対して、当会は庄内橋で立ち往生しているアユの救出作戦を実施しましたが、これは根本的な解決策にはならず、庄内川を管理している国土交通省に申し入れを行い、魚道の整備が進められました。

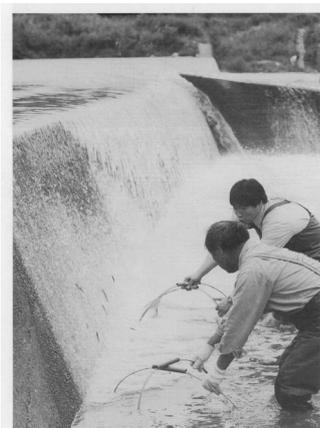


写真5. アユの救出作戦。(上段:こんな高い堰をアユが上れますか?)

(写真5) 平成20年には、魚釣り大会において初めてアユが釣りあげられ、また漸く矢田川にアユの遡上が確認されました。これは庄内川と矢田川の合流点の矢田川寄りに新たな魚道が設置されたからです。

当会では、今年度アユの生息調査に重点を置き、

活動します。これは国土交通省庄内川河川事務所との協働事業ですが、アユの遡上調査、アユの食み跡調査、アユの産卵調査などを実施します。都市河川である庄内川・矢田川において、おいしく食べられるアユが泳ぐきれいな川を実現できる可能性が見えてきました。

魚釣り大会に対しては、行政の名古屋市が名古屋市長杯を贈呈してきました。本年の魚釣り大会は活動35年記念事業として開催しますが、庄内川へ最大量の排水を流している企業にも参加を呼びかける予定です。

#### 4. 桜の銀行

当会の活動は「きれいな水を取り戻し、次代へ残す」とともに「あたたかい社会」を提唱してきました。その一環として桜銀行を開設しました。桜銀行では広く募金活動を行い、昭和53年5月には第1回植樹祭では、守山下水処理場の通水を記念し、同処理場構内および水分橋緑地に桜の樹木を寄贈しました。贈呈式には名古屋市長および地域の幼稚園児も参加しました。(写真6) その後、桜の生長に合わせて、観桜会を開催し、庄内川流域の桜植樹活動も継続しています。



写真6. 上段、下段。さくらの植樹。次世代の幼稚園児が参加してくれました。

## 5. けいしょうの森活動

徐々に川がきれいになっていく中で、新たな汚水  
源が発生しました。バブル時期にリゾート法が成  
立し、様々な開発ラッシュによって自然の破壊が  
行われたのです。(写真7) 庄内川の源流である山  
岡町ではゴルフ場が乱立し、川への農薬や肥料の  
流入が懸念されました。当会は現地のゴルフ場反  
対運動の住民と協働で「けいしょうの森」をつく  
りました。(写真8)

「けいしょうの森」宣言は次のとおりです。

私たちは 現在地球規模の環境破壊に歯止めをか  
けるためにその象徴の場所として、ここを「けいし  
ょうの森」とすることを宣言します。

「けいしょうの森」それは我々に安らぎを与えて  
くれる景勝であり、又これ以上自然破壊を続けると  
後世に禍根を残すという警鐘であり、そして「矢  
田・庄内川をきれいにする会」の一貫したテーマで  
ある「次代の青少年にきれいな水とあたたかい社会」  
を残すという継承であります。

自然破壊をするのはわれわれ人間です。又それを  
くいとめられるのもやはり我々人間しかありません。  
緑豊かな社会づくりの第一歩にしたいと思います。



写真7. 庄内川上流のゴルフ場予定地の視察



写真8. けいしょうの森石碑設置。けいしょうには景勝、継承、警  
鐘の意味があります。

## 6. 才井戸流の環境維持活動

大都市である名古屋市でもきれいな湧水が出る場  
所があります。守山区の地元では才井戸流と呼ん  
でいますが、そこではスナヤツメが生息し、カワ  
モヅク、ウワミズザクラやカタクリが生育してい  
ます。当会では、この豊かな自然を残す環境保護  
活動を続けていますが、今年度は地元の守山高校  
と協働でホタル調査や清掃活動を実施します。周  
辺では区画整理事業が実施されており、スナヤツ  
メはすでに絶滅している可能性があります。

## 7. 行政・自然保護団体・環境活動団体との協働

当会が活動している庄内川水系は、多数の大小の  
河川によって構成されており、岐阜県恵那市の源  
流地帯から伊勢湾までの広い範囲を含んでいます。  
従って河川浄化の活動は当会単独で行う事業から  
協働で参加する多数の事業にまで及んでいます。  
国土交通省庄内川河川事務所と尾張野鳥の会との  
協働により庄内川にビオトープをつくり、土岐  
川・庄内川流域ネットワークに所属して、上志段  
味ビオトープの運営に関わっています。(写真9)  
NPO土岐川・庄内川サポートセンターでは毎月1  
回、流域の農林魚産物販売市場の開設し、源流か  
ら河口までの流域住民の交流活動に参加していま  
す。健康な川が形成されるためには源流部の山々  
が整備されていることが条件ですが、当会は土岐  
川・庄内川源流の森の健康診断実行委員会に参加  
し、自然観察や科学的調査に関わっています。(写  
真10)



写真9. 矢田・庄内川をきれいにする会・尾張野鳥の会・建設省(国  
土交通省)庄内川河川事務所との協働により作られたビオトープ。

愛知県の委託事業である水辺再生と川の健康診断では、平成19年度、20年度に矢田川において、地域住民の参加のもとで、清掃作業、川の水の分析、水辺の生き物調査、日本の食料問題についてのパネル展示を実施しました。20年度は100名の参加があり、環境への意識が根強いことを示しています。(写真11)

国土交通省庄内川河川事務所の事業「リバーピア」には、平成4年から毎年参加しています。また、名古屋港を考える会、愛知の住民一斉行動デー、川の会等の活動に参加しています。



写真10. 森の健康診断。健康な川は水源の森により生まれる。

その他、庄内川水生昆虫調査、親子水辺教室、庄内川山菜調査、矢田川水生生物魚類調査、水辺教室、ピオトープ生物調査、魚道調査、守山自然ふれあいスクール、藤前干潟ゴミ拾い等の活動に参加してきました。

今回の環境大臣賞の受賞は、多くの諸団体に支えられた結果であり、書面をお借りして厚くお礼を申し上げます。



写真11. 川の健康診断。水生生物調査や水の分析を実施。

#### 参照文書

- (1) 川の汚れは心の汚れ、200万市民の願いを込めて
  - (2) 十三年のあゆみ
  - (3) 庄内川浪漫、30周年記念写真集
- いずれも矢田・庄内川をきれいにする会発行

文責 原 彰